

## Christmas Books *The Cricket on the Hearth* と Dot

本 田 三 男

### Dot's Desire and Sorrow in *The Cricket on the Hearth*

Mitsuo Honda

#### I

The kettle began it!<sup>1)</sup> (p. 159) で始まるこの物語は、はたしてどんな世界を描いたのだろうか。やかんは何を始めたのか。どたどた歩き、動作の緩慢な大男、正直者の運送屋 John の台所のやかんがかたかた音を立て始め、同時に炉辺のおろぎが平和で幸福な家庭を想像させる鳴き声をあげ始める。部屋の壁に架かっているオランダ製の時計の描写と相まって、英国の一小村の夕方の情景が浮かび上がって来る。厳しい冬、新年を間近にひかえた夕暮時、一日の辛い仕事を終えた一家の主人 John の帰りを待ち詫びる部屋の中には、芯から凍えきった男の体を暖めてくれる予感が満ち溢れている。作品に初めて登場する人物は Mary Peerybingle。Dot のあだ名を持つこの女性は、小柄で機敏、働き者の一児の母。その上美人で夫 John とは父娘ほど年が離れている。忙しそうにお湯を沸かし、生意気にも女主人の命令を無視してやかんの中に落ち込んだ蓋<sup>2)</sup> と格闘する彼女の姿は、まるでシルエットのように描かれ、これから始まる物語のヒロインを期待させる雰囲気はない。

第一章冒頭部分の、少々冗漫とも思える場面の主役はやかんでありおろぎでありオランダ時計。いや部屋全体であり、その暖かそうな部屋が感じさせる温もりかも知れない。従って彼女はまた、全風景の中の単なる添えものにし過ぎない。いまだヒロインとしての性格を持たない一つの点、まさに 'dot' そのものなのだ。

ここで読者は一つの疑問を持つ。暖かく平和な家庭の象徴的風景がここにはある。明らかに作者の意図の込められた書き出しではあろう。だがこれは本当に始まりなのだろうか。本当に何かが始まりそして終わるのだろうか。作品冒頭の、のどかな描写の中には、時の流れさえ止まってしまうそんな不思議な雰囲気が漂っている。

やかんの蓋のかたかた鳴る音は劇の始まりの合図。カーテンが上がり、観客は、一瞬舞台上で静止していた登場人物が突然動き出す、その微妙な瞬間を目撃する。しかし文字で書かれた物語として捉えれば、始まったばかりの場面に重なり合うように、誰か、おそらく男性が、暖炉の前の揺り椅子に深々と腰掛け、気持ちよさそうに半ば目を閉じ、パイプを燻らしている光景が見える。Dickens 三作目にあたるこの X-mas Book の導入部分は、読者を不可思議な夢の世界に誘う効果を見事に発揮していると言えるだろう。

新年が直前に迫った寒さの厳しいある日の夕方、夫の帰宅を待ち、夕餉の準備に追われる新妻 Dot の輪郭が見えて来る。彼女は陽気で若く美しく魅力的な女性だ。大男でどう見ても俊敏には見えない John の描写と比較すれば、Tackleton ならずとも、何故この二人が夫婦にと考

えたくなるかも知れない。実はこの何故と言う素朴な疑問が、この作品の出発点であり帰結点となる。

結婚一年目の記念日を数日後に控え、男の子<sup>3)</sup>も生まれ、Dot はどの点から見ても今の生活に満足している。John はもちろん妻を深く愛しており、炉辺には家庭の平和を守るこおろぎ<sup>4)</sup>の鳴き声が響いている。だが父娘ほど年の離れた John の心にごく僅かでも、「何故 Dot は自分の妻に。」との疑念がある限り、外見上の幸福は真の幸福とはならない。

Dickens が *Cricket* で描く世界は極めて精神的な世界に思える。その点では *Carol* や *The Chimes* の中で語られたものと類似した、見方によれば深刻な、要素を抱えている。

テーマは異なっている、Dickens はあくまで日々の生活の中の人間の姿、たとえ状況は違ってもそれぞれの人生で生ずる、喜怒哀楽の感情を見事に描き切った。うっかりすると見逃すかも知れない取るに足らない出来事も、彼の手にかかれば、深刻な問題になり得る事を彼は実証して見せた。*Cricket* も又その実例の一つと言えるかもしれない。

John の帰宅が一気に筋の展開を加速する。暖かい一家団欒の香りに満ちた部屋の中に突然喧騒が起こり、家族の構成員が突然姿を現す。この突然の出現は結末部分の登場人物が忽然と消え去る場面と符合して、作品の性格を読者に考えさせる手掛かりの一つとなっている。

Peerybingle 夫人の両腕に、いつの間に、赤ん坊が抱かれている。そのそばには、子守りの Tilly Slowboy なる女性が佇んでいる。Tilly については、その性格と役割が、作品の最後まで秘密のヴェールに包まれているが、彼女が恐ろしく子守り下手、それでいて誰からも愛される必要不可欠な存在である事を考える時、John の性格と役割に深く関係する女性ではないかと思われる。

ある意味で Tilly は空気のような存在。一家の中で何の役に立っているようにも見えないが、それでいて、彼女がいなくなれば、夫婦と赤ん坊、さらに彼女との関係の中で保たれている良好なバランスが、音を立てて崩れてしまう。そんな存在として描かれている。

運送屋 John はこの日、作品全体を動かし、平和な家庭にさざ波を立てるきっかけとなる二つの荷物を持ち帰った。一つは Tackleton と May の結婚式用のお菓子。もう一つは品物ではなく人間。この二つの荷物はいずれも Peerybingle 夫人に大きな変化を与える原因となり、平和そのものに思えた家庭に翳りを生じさせる小道具として使われる。

'I love it for the many times I have heard it, and the many thoughts its harmless music has given me. Sometimes, in the twilight, when I have felt a little solitary and downhearted, John — before baby was here to keep me company and make the house gay — when I have thought how lonely you would be if I should die; how lonely I should be if I could know that you had lost me, dear; its Chirp, Chirp, Chirp upon the hearth, has seemed to tell me of another little voice, so sweet, so very dear to me, before whose coming sound my trouble vanished like a dream. And when I used to fear — I did fear once, John, I was very young you know — that ours might prove to be an ill-assorted marriage, I being such a child, and you more like my guardian than my husband; and that you might not, however hard you tried, be able to learn to love me, as you hoped and prayed you might; its Chirp, Chirp, Chirp has cheered me up again, and filled me with new trust and confidence. I was thinking of these things to-night, dear, when I sat expecting you; and I love the Cricket for their sake!' (p. 167)

Dickens は最初に *Cricket* の位置づけを決定し<sup>5)</sup>、作品を書き始めた。従って二人の主人公

が Cricket を引用文に見られる様に考えているのは当然だ。ただこの中には祝福されるべき二人を襲う大きな試練を予感させるものが隠されている。Dot の本音、彼女の悩み、それら是一体何であるのか。陽気で快活な行動の奥に潜む真剣で深刻な問題を彼女は抱えているのではないか。その疑問を読者は感じないではおれない。

倍ほども年の離れた男性を夫に選んだ女性を感じる不安と考えれば、Dot の告白は当然に思える。だが、まず彼女の口から「二人の結婚への疑念」が発せられた事には意味があるような気がする。何故ならそれこそがこの物語の中で解決されなければならない問題であるからだ。

John は Dot をあるがままに愛している。彼女がより良い妻に、より良い母親に変わって欲しいとは少しも願わない。しかし Dot はどうだろう。彼女は「John が真に自分を愛せるようになるのか。」との不安を感じた。これは裏返せば彼女自身が真に夫を愛せるだろうかと考えている事を示してはいないのか。はたして John が自分を愛するように自分も John を愛せるのか。彼女の心の奥にある不安の正体はこの点にあるのではなからうか。

すでに述べたように、この夜 John の持ち帰った荷物の一つは結婚式用のお菓子。それが玩具商 Tackleton と Dot の友人 May の結婚式の品だと知った時、Dot の陽気さが突然失せ、炉辺のこおろぎも囀りを止める。作者は穏やかで平和な夫婦の会話の中に、突然、来たるべき苦しみの時への布石を準備する。ひたすら May を思い、この結婚が May の幸福に繋がらないと直感した Dot は John を前にして思わず本音を漏らす。

'Whose is it, John? Where is it going?

'Read the writing on the other side,' said John.

'Why, John! My Goodness, John!'

'Ah! who'd have thought it!' John returned.

'You never mean to say,' pursued Dot, sitting on the floor and shaking her head at him, 'that it's Gruff and Tackleton the toymaker!'

John nodded.

Mrs. Peerybingle nodded also, fifty times at least. Not in assent — in dumb and pitying amazement; screwing up her lips the while with all their little force (they were never made for screwing up; I am clear of that), and looking the good Carrier through and through, in her abstraction. (p. 168)

The Cricket, too, had stopped. Somehow the room was not cheerful as it had been. Nothing like it. (p. 169)

単に比喩としてではなく、文字通り、劇的な変化だ。*Cricket* は発表当初から一ヶ月以内に17回以上も劇化され<sup>6)</sup>、その後20世紀に入っても Dickens Fellowship のメンバーによって英国で、アメリカ、カナダで繰り返し上演されており<sup>7)</sup>、その度に「家庭の平和」の原点を示す作品として高い評価を受けて来たが、若し現在上演されるとすればこの場面はおそらく、照明は突如として暗くなり、B. G. M. も押さえた調子の哀しい調べになるに違いない。

Dot はひたすら May の事を考え続ける。自分達こそ年の離れた、不似合いの夫婦だとは考えてもいない。少なくとも作品の中ではそう思える。John は Dot が何度も軽口を叩いて来たように、大男で動作は鈍く、とても回転の早い頭脳を持ち合わせているとは思えない。しかし外見上この二人は愛し合っており、平和で幸福そうだ。Dot はこの夫婦の絆にひびが入る可能性など考えた事もないのだろうか。

彼女が May と Tackleton についてふと口にした言葉を John は自分達の関係に当てはめ始める。

彼の心の中で May が Dot に Dot が May に重なる。「こんなに年が離れているのに。」「とても幸福な夫婦になるとは信じられない。」妻の一語一語が容赦なく彼の心に突き刺さる。ただ彼はその痛みを外に表現出来ないだけなのだ。

Dickens は John の性格を気高いものに造り上げた。

He was often near to something or other very clever, by his own account: this lumbering, slow, honest John; this John so heavy, but so light of spirit; so rough upon the surface, but so gentle at the core; so dull without, so quick within; so stolid, but so good! Oh Mother Nature, give the children the true poetry of heart that hid itself in this poor Carrier's breast — he was but a Carrier by the way — and we can bear to have them talking prose, and leading lives of prose; and bear to bless thee for their company! (pp. 163-164)

彼は日常生活で生じる事象をただちに心で感じ取る能力がある。だが具体的反応として、表現するのに時間を要するだけなのだ。Dot が尋ねた学校で習った歌, “How doth the little”<sup>8)</sup> (p. 165) で始まる唱歌は忘れていても, きちんと,

‘You’re such an undeniable good sleeper, sir,’ said John, when tranquillity was restored; in the mean time the old gentleman had stood, bareheaded and motionless, in the center of the room; ‘that I have half a mind to ask you where the other six are’<sup>9)</sup> —. (p. 170)

と学のある所も見せる。

注目しなければならないのは, 彼の善良さゆえに結婚を承諾した Dot に, 彼の本当の姿が見えていない事だ。彼女は確かに申し分ない。妻として母として, 夫を愛し子どもを愛し, 家庭を守っている。彼女は現状に満足している。だが同時に彼女の心のどこかで, 違った何かを考えており, それを完全に拭い去る事ができない。この作品の大きなテーマの一つは, その違うものとは何かを明らかにする事で見えて来るのではなかろうか。

John が運んで来たもう一つの荷物は人間だった。その人物は老人で, 黒い服を着て耳が遠い。この老紳士はお菓子同様, この物語に, 又 Dot の心に影響を与える。Dickens はこの老紳士を登場させるに当たって劇としての効果を狙っていたのではなかろうか。劇中の登場人物のように, 老紳士は作中の他の人々に不吉な予感を与える。だが読者にはすぐ彼が, 老人でも耳が遠くもないのが分かる。彼が Dot に耳うちし, その後彼女の不可思議な態度や行動が始まる事実から, 読者は彼が一種の ‘dramatic irony’ の役割を持っているのを知る。この場面では読者はストーリーを読み進むのではなく, まるで観劇しているかのような錯覚を覚える。そして Dickens の意図もそこにあったとは言えないだろうか。

黒服の老紳士は悪魔をイメージさせるが<sup>10)</sup>, 彼を見た Tilly Slowboy の反応は面白い。

Miss Slowboy, conscious of some mysterious reference to The Old Gentleman, and connecting in her mystified imagination certain associations of a religious nature with the phrase, was so disturbed, that hastily rising from the low chair by the fire to seek protection near the skirts of her mistress, and coming into contact as she crossed the doorway with an ancient

Stranger, she instinctively made a charge or butt at him with the only offensive instrument within her reach. This instrument happening to be the baby, great commotion and alarm ensued, which the sagacity of Boxer rather tended to increase; for that good dog, more thoughtful than its master, had, it seemed, been watching the old gentleman in his sleep, lest he should walk off with a few young poplar trees that were tied up behind the cart; and he still attended on him very closely, worrying his gaiters in fact, and making dead sets at the buttons. (p. 170)

彼女はとても不器用だ。子守りが勤まりそうには思えない。だが彼女の精神は純粹無垢だ。読者はどの点から考えても、およそ子守りは勤まりそうもない、それどころか、一番不向きにさえ見える彼女の存在について考える時、彼女は何か別の性格をこの作品の中で与えられているのではないかと思わずにはおれない。いてもいなくても良さそうな存在であって、やはりいるのが当たり前だと考えさせる何か。それを彼女は持っている。彼女の心の邪気の無さ、彼女の描写を考える時、それはどうも John の性格と切り離せないものに思えて来る。極論かも知れないが、どうも彼女はもう一人の John。John の精神の純真さを作者は Tilly Slowboy の中に描いて見せたのではなかろうか。そう考えれば、上記引用文で彼女が本能的に追い払おうとしたものは、John に降りかかる不吉の蔭、悲しみの予感になる。この場面では John がその場で感じ取っても、そのまま外に表現出来ないものを Slowboy が代って表現したのではなかろうか。

物語は Tackleton と May の結婚を軸に展開する。Tackleton の性格を知る Dot は当然反対する。しかし彼女の反応は単なる反対ではなく、生理的嫌悪感にも似た異常さを感じさせる。それが John の心に一つの疑念を生じさせる。「Dot は父娘ほど年の離れたこの結婚に反対している。としたら自分達も同様だ。もしかして Dot は我々の結婚を後悔しているのでは。」John と Tilly の精神の類似についてはすでに述べたが、これによって作者は二人の 'fairy' 性を示そうとしたのかも知れない。だが John は同時に嫉妬し苦悩する人間でもある。明らかに生身の人間として描かれている Dot に関わる時、John も又人間となる。このように彼の性格は 'fairy' と人間の両面を持っているように思えるが、その人間としての彼が Dot の心が読めなくて悩み始める。

ここで注目すべき点は、この作品を通じほとんど全ての部分で、最も祝福されるべき Peerybingle 夫妻の心は通い合っていないと言う点だ。二人が信頼し愛し合っているのは、John が二つの荷物を持ち帰る前と、John が Tackleton に Dot に対する胸の内を語った最終章の場面以降だけである。では二人の愛の形に、以前と以後、変化が見られるのか。若し変化があるとすればそれはどのようなものなのか。さらにその間 Dot は、何故なら John は一貫して Dot を愛しており、若し迷いが有るとすれば、それは Dot の側以外には考えられないからだが、何を考え、何を悩んでいたのか。それを知る事がこの作品のテーマを知る上で、最も重要な事に思える。

## II

この微笑ましく平和だがどこか哀しい物語の中で Tackleton だけが異質な存在に見える。少なくとも *Chirp the First* に登場する彼はそう思える。彼は片意地で屈折した性格の為、May の母 Fielding 夫人と盲目の少女 Bertha 以外の誰からも嫌われている。Fielding 夫人は、脇役に

しか過ぎないが、彼女の人生観、娘の結婚に対する考え方では、Tackleton と類似点を持っており、しかもそれを Dickens は決して否定的には描いていない。心優しい人々の世界で、この両者の考え方は、妙に現実的で存在感がある。その存在感が 'fairy world' に程良い微妙なバランス感を与え、この作品が単なる Fairy Tale になってしまうのを防いでいる。まさに Dickens の腕の見せ所であろう。

兎に角 Tackleton は嫌われている。彼が近づけばこおろぎも鳴くのを止め、Peerybingle 家の愛犬 Boxer も吠え立て始める。彼の無上の喜びが、子ども達の玩具の中に、そっと気味悪い品を忍ばせ、彼等が怖がるのを想像する事にあると分かれば、これも無理からぬ事だ。

それにしても Dot が Tackleton を嫌う様子は並外れている。彼が John と彼女の結婚を、齒に衣を着せず、ずけずけと、「信じられない事だ。」と公言するので、当然と言えば当然だが、それでも Dot の反応は奇異に思える。さらにあの老紳士が、かつての May の恋人 Edward だと知る以前に彼女は嫌悪の気持ちを示した。何故であろうか。John 自身が、おそらく、彼女の即座の反応を自分達の問題に置き換え始め、彼の分身とも思える Tilly が、本能的に振り払おうとしたあの場面が示してくれる様に、Dot 自身の心の奥底に Tackleton の言葉を完全に否定し得ない何かがあったからではなかろうか。だからこそ彼女は Tackleton の結婚を知ったあの瞬間から、善良な夫 John と意志の疎通が出来なくなったにちがいない。彼女が真に John の気高い心の底を覗き、それに触れる事の出来るその瞬間が来るまで、Tackleton が May にとってそうである様に、彼女にとって John は「父娘ほども年の離れた、夫とは言えない夫」なのかも知れない。

第1章 *Chirp the First* で作品の展開に必要なほとんど全ての要素が提示された。John の持ち帰った二つの荷物は、Dot の平穏な日々をかき乱すに十分な効果を発揮した。彼女が嫌う男と友人 May が結婚しようとしている。John の運んできた荷物の一つは、かつての May の恋人 Edward だった。Dot は二人が愛し合っていたのを知っていた。彼女が取るべき道は明白だ。愛よりも世間体を考え結婚を目論む彼の計画を妨害し、何とか May と Edward を結びつける事。それが彼女の大目標となる。結果として John が、彼女と Edward の仲を疑い、苦しむ事になったとしても彼女は John に真相を話そうとしない。一人で秘密裏に事を運ぼうとする。何故であろう。John がつい口を滑らせ、彼女の思い通りにならないのを恐れた為か。John の頭脳が自分について来れないと決め込んでいたからか。何れにしても、読者は、John に対する彼女の行動を不可解に感じる。Dot は John の善良さ純真さを良く知っていた。だからこそ一年前、今自分が反対する結婚と同様に思える John との結婚に同意したのだ。John と Tackleton は違う。それは確かだ。だが本質的に何が彼女にとって違っていると言えるのか。Tackleton は自分を感情の人間ではないと語る。結婚に賛成、反対のどちらとも意志表示をしない May も、一度結婚し、Peerybingle 夫妻の家庭を見、自らの家庭を考え、裕福で何一つ不自由のない日常生活が始まると、やがては家庭の幸福を感じ、夫である自分を愛する様にきつとなる。彼一流の現実的論理だ。不思議な事に Tackleton にこの論理を語らせる時、作者 Dickens の彼に対する優しい眼差しを感じる。作中人物の中で、一人異質な様に設定しておきながら、彼が John にこう語って見せる時、何故か Dickens も彼の背後で、それはそうだと肯いている姿が浮かんで来る。作者独特の皮肉の込められたユーモアが感じ取れる。

第1章で Tackleton と前後して Peerybingle 家を訪れた玩具職人 Caleb の人生は儚く哀しい。娘 Bertha は気立てが優しく、彼の生きる支えだが、目が見えない。一人息子の Edward は南アメリカに出かけたまま音信不通で、死んだものと思われている。貧しい暮らしの中でも、ひたすら娘の幸福を願い生きて来た彼は、Tackleton に雇われ、辛うじて親娘二人の生計を立て

ている。

哀れな Caleb は娘に対して一つ、大きな負い目がある。それは娘を悲しませたくないと願う父の、ふとした思い付きであったのかも知れない。彼は幼い時から盲目の娘に、全て現実と逆を教えて来た。言葉で尽くせない程貧相な彼等の家も娘には、素晴らしく居心地の良い場所。冷淡で貪欲な主人 Tackleton は、陰ながら二人を見守る守護神。彼が口にする辛辣な言葉も盲目の Bertha を元気づける為のジョーク。成長するにつれ、彼女の心に純真で清い恋心が芽生えるのも無理からぬ事かも知れない。

そんな Bertha に Tackleton は May との結婚を語る。Bertha の驚きと衝撃は計り知れない。だがその時の彼女の反応は興味深い。何よりも彼女の反応が、第1章に於ける Dot のそれと酷似している点を見逃す事は出来ない。もちろん Dickens は、巧みな計算で、両者のキャラクターを描き分けてはいる。従って二人の反応はそれぞれに、ごく自然な流れに沿っている様に見える。それでいて何か Bertha と Dot には類似点がある。二人が共に、心優しく素敵な女性として描かれている事以上の、もっと良く似たものを読者に感じさせる何かがあるが、二人の人物描写には込められている。

She had drooped her head, and turned away; and so stood, with her hands crossed, musing.  
(p. 189)

Bertha remained where he had left her, lost in meditation. The gaiety had vanished from her downcast face, and it was very sad. Three or four times, she shook her head, as if bewailing some remembrance or some loss; but her sorrowful reflections found no vent in words. (p. 189)

Bertha は目が見えない。父 Caleb の愛情だけを、肌で感じて生きて来た。その父が騙し続けているなどと思っても見ない。結果彼女の中に構築された世界は、極度に純化され、美化され、至福の世界へと昇華している。人間が持つ多面性やきまぐれを、少しでも学習していれば、Tackleton の言葉に潜む刺を、時には感じ取った筈だ。その機会を Caleb が、悉く摘み取って来た。それどころか、あらゆる悪意を善意に置き換えて来た。Caleb の罪は大きい。最後まで嘘が通せるとしてもいいのに、その場その場を網渡的に誤魔化し、儂く脆い束の間の幸福を Bertha に与え続けている。些細な悪気の無い小さな嘘に始まった「欺き」が、今では一人歩きを始め、抜き差しならなくなっている。

父も娘も、ただ相手を思い遣り、良かれと願いながら、Caleb にして見れば、思いもかけない段階にまで達した Bertha の精神世界は、感謝と尊敬の気持ちから、仄かに恋心を抱くまでに達しているが、Tackleton の口から May との結婚を聞かされた時、彼女は生まれて始めて心の動揺を体験する。彼女が、'Father, I am lonely in the dark. I want my eyes, my patient, willing eyes.' (p. 189) と語るその言葉の中に、彼女が受けた衝撃と悲しみの深さが示されている。だが同時に、この言葉の中には、作品中の彼女の役割、つまり作者が彼女の中に何を意図しているかが暗示されている。彼女の言葉は又、読者にとって、一種の 'dramatic irony' 的効果を与えているのかも知れない。Bertha は単に盲目で、Tackleton の真の姿や、Caleb の姿が見えないだけではない。彼女の心の目も又何も見えてはいない。目が見えない為、研ぎ澄まされなくてはならない心の目が閉ざされている。Dot に取って、John の心の奥に触れ、彼の気高い精神を知るのが課題であるように、Bertha は心の目を開けて、現実を知り、新たに強固な精神世界を再構築しなければならない。

Bertha に見えて真実なもの、それは Caleb の深い愛情と Peerybingle 夫妻の善意。彼女のような境遇にあって、幸福である為には、それだけで十分かも知れない。悪意や軽蔑は出来る事なら知らない方が良い。Caleb が自己弁護する時の論拠はそれだろう。だがこの場面で Bertha は、見える目が欲しいと願った。読者にはそれが実際の目である必要はない。彼女は盲目であるがゆえに、真実を見抜く心の目が欲しい。ここで彼女はそう語っているのだ。

Tackleton は Bertha が少し知恵遅れだと考えている。彼は当然彼女の自分に対する気持ちを感じ取っている。「お前は何を分不相応な事を。」彼が Bertha を知恵遅れと決めつけるのは、その思いからだ。しかも彼はそれを面と向かって口に出す。ところが Caleb の抗議の言を待つまでもなく、彼女は聡明だ。父の涙ぐましい的外れな努力で、現実を逆に見て、そこで十分安住しておれるから、彼女の言動は Tackleton に非現実的に映っただけなのだ。

Bertha は聡明で魅力的な女性だ。ただ残念な事に、父 Caleb の深い哀しみは読み取れない。父を愛するあまり、文字通り盲目的に、父の言葉を信じる。May は美人かと尋ねた後で彼女は語る。

'Our friend, father, our benefactor. I am never tired, you know, of hearing about him. — Now, was I ever?' she said, hastily. 'Of course not,' answered Caleb, 'and with reason.' 'Ah! With how much reason!' cried the Blind Girl. With such fervency, that Caleb, though his motives were so pure, could not endure to meet her face; but dropped his eyes, as if she could have read in them his innocent deceit. 'Then, tell me again about him, dear father,' said Bertha. 'Many times again! His face is benevolent, kind, and tender. Honest and true, I am sure it is. The manly heart that tries to cloak all favours with a show of roughness and unwillingness, beats in its every look and glance.' 'And makes it noble!' added Caleb, in his quiet desperation. 'And makes it noble!' cried the Blind Girl. 'He is older than May, father.' 'Ye-es,' said Caleb, reluctantly. 'He's a little older than May. But that don't signify.' 'Oh father, yes! To be his patient companion in infirmity and age; to be his gentle nurse in sickness, and his constant friend in suffering and sorrow; to know no weariness in working for his sake; to watch him, tend him, sit beside his bed and talk to his awake, and pray for him asleep; what privileges these would be!

What opportunities for proving all her truth and devotion to him! Would she do all this, dear father? (pp. 190-191)

Caleb は Bertha の言葉を聞き、「まるで自分の欺きを読まれたかのように」目を伏せずにはおれなかった。昂り、熱っぽく、見えない目を輝かせ Tackleton の人となり語り続ける Bertha。May が Tackleton にしてあげるだろうかと尋ねる数々の「特権」は、純粹培養された彼女の心の中で、彼女自身がそうしたいと願うものに他ならない。

彼女の姿に、もう一人の、別な形の Dot の姿が重なって見える。家庭を守るこおろぎの精が、温かい目で見守り、失望と深い悲しみの最中に有って、そっと救いの手を差し延べてくれる、想像の世界の理想的妻の姿が浮かんで来る。

Bertha は登場人物の重要性を考えれば、Caleb 同様、欠く事の出来ない独立した存在だと言えよう。Peerybingle 夫妻の幸福と、Plummer 父娘の幸福は、作品のテーマの二本柱だと言えよう。それでも読者は時として、Dot と Bertha は、Dickens の意識の中で、重なり合っているのではないかとの思いに駆られる。Bertha が Dot の中に在るのか。Bertha が Dot の全存在の一部として描かれているのか。その答がイエスか否かで、作品の持つ意味が大きく変わり



かねない。二人の女性の関係は、この作品を理解する上で、大きな意味を持つのではなからうか。

Tackleton は、Peerybingle 家の人々と Plummer 父娘が定期的に、ピクニックに出かけるのを知っていた。そこで彼は、自分と May, さらに彼女の母 Fielding 夫人も参加したいと伝えに Plummer の家にやって来た。彼の意図は明らかだ。親娘ほど年の離れた Peerybingle 夫妻の幸福な家庭を May に見せ、彼女の結婚への不安、ためらいを取り去りたい。その一点に有る。自らに誇り高い彼は、愚鈍な John より自分が、男性としてはるかに魅力的だと考えているので、それも May に印象付けたい。結婚式を間近にして、何故彼はこんなに焦っているのか。又 May のためらいと述べたが、作品の中で彼女は不可解な存在だ。彼女の気持はほとんど読者に伝わってこないし、彼女が何を考えているのか、描かれてはいない。読者はただ Tackleton や Dot の言動から、それを推測する他はない。その事は又 Edward に関しても同じだと言えるかも知れない。南アメリカから帰国し、彼がまず尋ねなければならないのは、父と妹の安否であるはずだ。それなのに、まるで彼には May の事以外眼中に無いように思える。May と Edward は単に筋の展開に必要な「小道具」として作者が意図していたとは、とても考えられない。だとしたら、この二人は、何か別の、もっと違った、目には見えない目的の為に造り出されたと考えられる。それが何か、見える人は探して下さい。そうで無ければそのまま結構。いつもの Dickens の遊び心が、二人の設定の中に見えて来る。

Tackleton は焦っている。若しかして事が運ばないのでは。彼の心に拭い去れない不安がある。彼には計り事が必要だ。何としても May の気持ちを自分に向ける確実な作戦。それがあの合同ピクニックだったのだ。

恒例のピクニックは、いつもと趣きを異にしていた。Tackleton の実利的な企みのせいだけではない。Dot に彼とは全く逆の思惑があった為だ。彼女は、普段の彼女ではない。John は、Dot の異常な気持ちの昂りを訝る。May に再会した Dot は語る。

'Ah, May! said Dot. 'Dear, dear, what changes! To talk of those merry schooldays makes one young again.' 'Why, you an't particularly old, at any time; are you?' said Tackleton. 'Look at my sober plodding husband there,' returned Dot.

'He adds twenty years to my age at least. Don't you, John?' 'Forty,' John replied. 'How many you'll add to May's, I am sure I don't know,' said Dot, laughing. 'But she can't be much less than a hundred years of age on her next birthday.' 'Ha ha!' laughed Tackleton. Hollow as a drum, that laugh though. And he looked as if he could have twisted Dot's neck, comfortably. 'Dear, dear!' said Dot. 'Only to remember how we used to talk, at school, about the husbands we would choose. I don't know how young, and how handsome, and how gay, and how lively, mine was not to be! And as to May's! — Ah dear! I don't know whether to laugh or cry, when I think what silly girls we were.' May seemed to know which to do; for the colour flushed into her face, and tears stood in her eyes. 'Even the very persons themselves — real live young men — were fixed on sometimes,' said Dot. 'We little thought how things come about. I never fixed on John, I'm sure; I never so much as thought of him. And if I had told you, you were ever to be married to Mr. Tackleton, why you'd have slapped me. Wouldn't you, May? Though May didn't say yes, she certainly didn't say no, or express no, by any means. (pp. 197-198)

Caleb の息子、南アメリカで行方不明の Edward はかつて、May の恋人だった。彼の帰国を知った Dot は、どうしても Tackleton の計略を阻止しなければならなかった。計略には計略。彼女は又、この作品の中で、Tackleton 以外に策を練る唯一の人物となる。しかし、彼女が躍起になればなる程、彼女は Tackleton の現実的論理に近づかざるを得ず、それは即、John の精神世界から遠ざかる事を意味する。

May に語りかける Dot の言葉は John の心を傷つけて行く。「学校時代に考えた未来の夫は、若くハンサムで、陽気で活発な人ではいけなかったのだわ。」何と冷酷な響きを持つ言葉だろう。John の動作は鈍い。Dot はしばしばそれを冷かし、それどころか、彼の頭脳も心の動きもそうだと思います。だが決してそうではない。むしろ俊敏とさえ言えるかも知れない。Dot であれ Tackleton であれ、周囲の人々の言葉や行動の持つ意味を、素早く正確に感じ取る力がある。ただそれを、ただちに、はっきりとした形で外に表現出来ないだけなのだ。

上記引用文の場面で Dot が語った内容は、John の心には、読者が読み取るように、彼女の策略から出たものとは聞えない。彼女の言葉は彼女の本心を伝えている。John はそう直感したからこそ、最終章で、あの大きな苦しみを味わわなければならなかった。彼は、Tackleton の一言で、Edward が Dot のかつての恋人だったと誤解し、悩んだのではない。Dot の心の片隅にある、彼女さえも意識していない願望、May と Edward の様で有りたいと願う当然の乙女心、それを見たからこそ真剣に彼女の思いを受け止め、結局彼女の幸福を願い、彼女を自由にしようと思ったのではなからうか。

この作品の主要なテーマが Peerybingle 夫妻の愛情の形に有る事が見えて来たが、第二章には Dot の性格を知る上で、忘れる事の出来ない場面がある。この場面は又、John の直感力の正確さを示しており、同時に彼が愚かではない事を示してくれる、言わば作者の与えているヒントにもなるものだ。

You know sometimes, when you are used to a pretty face, how, when it comes into contact and comparison with another pretty face, it seems for the moment to be homely and faded, and hardly to deserve the high opinion you have had of it.

Now, this was not at all the case, either with Dot or May; for May's face set off Dot's, and Dot's face set off May's, so naturally and agreeably, that, as John Peerybingle was very near saying when he came into the room, they ought to have been born sisters — which was the only improvement you could have suggested. (p. 196)

John はもう少しで、「Dot と May は生まれながらの姉妹であるべきだった。」と口にしかかった。すでに述べたように、彼が心で感じたものは、真実だ。この時 John の頭の中で、Dot が May に May が Dot に重なり、二人の区別がつかなくなった。Dickens は単に、二人はとても美しかったと言いたかったのか。否。John の直感が、それ以上の重大なメッセージを、読者に送っている。May の存在を、Edward 同様、妙にぼやけて不可解なベールで覆う事により、作者は、May の居場所を考えなさい、本当に「小道具」として描かれているだけですか、とのシグナルを送っている様に思えてならない。つまり May の居場所は、John の直感が教える様に Dot 自身の中にもある。そう考える以外に彼女の存在感の無さを説明する方法はなく、そう考える事で表面的筋の展開に隠された Dot の本当の姿が見えて来る。

この物語の中で登場人物達に問われ続ける問題は常に、「見えていますか。」「何で何を見ているのですか。」に有るように思えるが、同時に Dickens は同じ質問を読者にも投げかけてい

る。そう考える事は出来ないだろうか。

### III

作品の中で人の心の真実を在るがままに感じ取る能力を持つ者は、John, Tilly Slowboy, Bertha の三人だろう。Bertha に関して言えば、父 Caleb の作り話の為に Tackleton の本性が見えない。但しそれは、父親への愛情の深さを示すものに他ならない。ある意味で彼女は、物理的にも精神的にも、「見えない」女性として設定されなければならなかった。本質的に物事の真実を感知する力が有りながら、Caleb との係わりから、又 Dot との関連で、その必要があった。それによって作品が、表面的には単純、素朴、明快に見えながら、薄明かりの霧の中を歩く時の様に、不可解で奥行きを持つものを感じられる効果を引き出す事になる。霧が晴れたら、何も無いかも知れない。だがもしかしたら、想像もしなかったものが目の前に在るかも知れない。Bertha の設定は、読者に何かを考え込ませる要素を持っている。

さて次に、Tilly Slowboy が一目見て不安を覚えたのは何故だろう。彼女が黒い服を着て、耳の遠い老紳士に悪魔を連想し予感したもの。それは John の苦悩、愛すべき Peerybingle 夫妻の絆に入る亀裂だった。第1章で、老人に変装した Edward は、Dot に自分の正体を打ち明けた。彼が May を愛していたのを知る Dot は、何とか秘密裏に二人を結婚させようと奔走する。この筋立てが、作品の展開に多様性を生み出し、登場人物の些細な行き違いや誤解が、時にユーモアを呼び、時に涙を誘う。同時に読者には先の展開へのヒントが常に提示され、すでに述べた様に、物語を読み進んでいるのか、劇を観ているのか分からない不思議な世界に引き込まれる。物語は完全に読者の予測通りの結末を迎え、あの屈折した、現実主義の Tackleton でさえ、妖精の影響を受け、平和で穏やかな夢の世界に吸収されてしまう。その世界は「悪人」の存在し得ない世界で、皮肉にも、偽りの世界を見つづけていたはずの Bertha が考えていた通りのものだった。

すでに示して来たように、*Cricket* の魅力は、X-mas Book に相応しい、理想的な家庭の有り様<sup>11)</sup>を描いて見せた事だけに留まらない。表の筋の展開と、裏の筋が語られて行き、その中で登場人物が渾然一体となり、時間の流れさえ、過去、現在が同時に存在している。Dickens は、新年を直前にした数日間に表の舞台を限りながら、一年以上に渡る時の流れを織り込み、人間関係を複雑に分化させて、何度か単純化し、その後再び分化させる作業を繰り返している。まるでその様子は、この作品が、読みものであり、劇であり、同時に誰かの長閑な一瞬の夢であると言う作者のメッセージでもあるかの様だ。

運送屋 John が平和な家庭に持ち帰った二つの荷物は、彼にとって、重要で真剣な苦しみの時へのきっかけとなるものだった。両方ともに Dot に関わり、John に関わり、最後には二人が真実の愛情を見出すのに役立つ小道具として使われている。しかし、最終章 *Chirp the Third* のハッピー・エンディングに至るまでに、二人だけの視点で見れば、二つの荷物は不幸への始まりであり、不幸そのものだった。

Dot がお菓子を見て、May と Tackleton の結婚を知り、老紳士が実は Edward だと聞かされたその瞬間から、Dot は John にとって以前の彼女ではなくなった。つまり彼女は、夫 John に対し、本心を、自らの行動の目的を全く明かさず存在となった。真実を察知する能力の有る John が、それに気付かないはずはない。日常生活のふとした出来事の中で、何度も彼は Dot の心が読めない自分を感じたに違いない。老紳士に対する妻の態度。躍起になって May に、年上の男性と結婚してはいけないと暗示する妻。日々の生活はいつもと少しも変わらないのに、

どこかちぐはぐで、別人の様な妻。John が、Dot の自分に対する愛情に、疑念を抱く描写が繰り返される。第2章、終わりの場面で、Tackleton から Dot と老紳士との密会を見せられた時、John が Edward を Dot のかつての恋人と誤解したのも当然だ。考えて見れば、Dickens の描く Peerybingle 夫妻の描写は、作品のほとんどの部分で、意志の通わない夫婦としてのものだ。John は考える。

He was the younger man! Yes, yes; some lover who had won the heart that he had never touched. Some lover of her early choice, of whom she had thought and dreamed, for whom she had pined and pined, when he had fancied her so happy by his side. O agony to think of it! (p. 208)

この引用部分で John が考えた事の中には、大きな問題が含まれている。「Dot の心に John が一度も触れた事は無かった。」表面的には、もちろんこれは、彼の思い過ぎだ。だが本当にそうだろうか。最終章で夫の苦しみを知った Dot は、それでも、彼に真相を語ろうとしない。自分の行動に対する弁解を何一つしようとしない。John が悩むがままに放置し、それを受け自分も苦しみ続ける。彼女には一連の行動の目的を、明確に説明出来るだけの根拠がある。一言それを話せば、全ての誤解は解ける。だが彼女は黙して語らない。最終章のこの微妙な、もどかしい間の意味するものは何であろうか。明らかにそこには Dickens の意図が隠されている。若しかして、本当にこの時点で、John は Dot の心に触れていないのではないか。Dot が沈黙を続けるのは、彼女が夫に対して明確に、ノーと言えない部分を持っているからではないか。読者が感じるこの思いが、当たっているのかいないのか。その点にこの作品の持つ深みの軽重が係わっている様な気がしてならない。

作品の中には、現実の世界と非現実、超現実の世界が混在している。Caleb は玩具職人として、子ども達を喜ばせる玩具を作り続けて生きている。彼の作る人形や家、ノアの箱舟や動物同様、登場人物も又誰かに覗かれている玩具の村の住人。そういった錯覚に落ちいる不思議な雰囲気、この作品は常に漂わせている。

ともあれ、やかんが湯気を噴く音と、こおろぎの鳴き声の合奏で始まった物語は、家庭の守護神こおろぎの再登場を待たずには終わらない。妻の愛情を疑い、自ら目撃した光景で、Edward と Dot の仲を誤解した John は、大きな苦悩の時を経験する。苦しみの最中、こおろぎの精が現われ、温かいが冷徹な眼差で、真実をあるがままに見つめろと促す。第1章で John は在りのままの Dot を愛していた。彼女が妻として母として、より良く変わる事など願ってもいなかった。長所も欠点もすべて含めて、そのままの Dot を愛していた。たとえ彼女の心が、別の男性に向いていたとしても、それでも彼は Dot を愛し、彼女の幸福を追い求める。厳しく重い苦しみの後、John が到達した境地はそれであるが、考えて見れば、それはまさに、作品登場場面での彼の心境と何ら変化はない。ただ苦しみを経て、再確認し、より強固になったにしか過ぎない。

John の本質は変わっていない。では Dot の場合はどうだろう。彼女は陽気で活動的、夫を愛し子どもを愛し、盲目の Bertha を優しく気づかう。彼女はただ、周囲に笑いと幸福を与える為にのみ生きている様に見える。涙や哀しみは、彼女には似合わない。苦悩する John の前に、こおろぎの精が見せた通り、Dot ほど理想的な妻は存在しない。作者も登場人物も読者も、それを否定する者は唯の一人もいない。それなのに彼女には、驕りがある。その原因は何かと考える時、第1章の Tackleton に対する過敏とも言える彼女の反応が浮かんで来る。あの時

Dot は Tackleton の結婚に即座に反発を覚えた。老紳士が May のかつての恋人 Edward だと知る前の出来事だった。人に悲しみを与え、人を憎むはずの無い彼女が、Tackleton に対して、生理的とも見える嫌悪を見せた。すでに述べた John に対する最終章でのもどかしい間と、Tackleton への反応の微妙なずれの中には、作者の意図する Dot 像が隠されている様に思える。Dot はどのような女性として描かれているのか。作者はこの Fairy Tale の中で彼女をどの様に位置づけ、彼女の中に何を描こうとしたのか。それが John との愛の形に関わるのは間違い無いだろう。ではその夫婦の愛の形とは何か。最終章で見られる John の苦しみの深さを思う時、読者は Dot の心の奥底に目を向けないわけには行かない。

物語は老紳士が May の昔の恋人 Edward だと分かり、Dot の努力で二人はめでたく結婚し、Tackleton 一人涙を飲むが、彼も又 Bertha が偽りの世界の中で想像し、憧れ続けた人間に近づいて終わると言う当然のエンディングを迎える。全ての誤解は解消し、John は Dot の真意を知り、二人の家庭に再び平和が訪れる。作品の展開は読者にそう予想させるに十分なものだった。だが最終章で作者は、あまりに深刻で重々しい場面を続ける。おそらくそれは作者が、John に老紳士の正体が分かり、Dot の不可解な行動の意味が分かったとしても何の解決にもならない問題を描き続けて来たからに他ならないだろう。つまり Dot が Tackleton を嫌ったのは、単に彼の性格の為だけではなく。彼が Peerybingle 夫妻を前に平然と口にし続けた言葉。「私にはお前達二人が、どうして夫婦で有り得るのか、その理由が分からない。John が Dot を愛するのは分かる。だが陽気で活発で美しく、父娘ほども年の離れた Dot が何故心底 John を愛せるのだ。Dot に相応しい夫は別にいるのではないか。」Tackleton のこの現実的考えを Dot も又心の片隅に持ち続けていたからこそ彼女は、Tackleton を嫌ったのではなからうか。作品の中で、John に Dot の心が読め無くなったその理由は、彼女も又 Tackleton の投げかけた言葉で、自己懷疑の世界に落ち込んだからではなからうか。「John が自分を愛しているように、自分もはたして彼を夫として愛せるだろうか。」彼女がその答えを見い出さない限り、二人の家庭に真の幸福は訪れない。最終章で展開される John の苦悩と悟り、それを見つめる Dot の涙。これらのものが示しているのは、*Cricket* の本当のテーマは、Peerybingle 夫妻が表面的な見せ掛けの幸福ではなく、二人が相互に相手を尊敬し、愛し合い、相手の幸福のみを願えるかどうか、その一点にあると言う事だ。John がこおろぎの精の助けを借りて、その境地に至った時始めて、Dot の心の蟠りが消え去った。Tackleton に対して John が語った真実の叫び、

'Did I consider,' said the Carrier, 'that I took her —— at her age, and with her beauty —— from her young companions, and the many scenes of which she was the ornament; in which she was the brightest little star that ever shone, to shut her up from day to day in my dull house, and keep my tedious company? Did I consider how little suited I was to her sprightly humour, and how wearisome a plodding man like me must be, to one of her quick spirit? Did I consider that it was no merit in me, or claim in me, that I loved her, when everybody must, who knew her? Never. I took advantage of her hopeful nature and her cheerful disposition; and I married her. I wish I never had! For her sake; not for mine!' (p. 217)

この叫びには、John の精神の気高さが感じられる。John はもはや、のろまでへまな善良なだけの大男では無い。彼の心の動きと外面は、この瞬間一体となった。この言葉を聞いて Dot の心が動かない筈がない。彼女は今こそ夫 John への、一点の曇りもない愛情に目覚めたのだ。彼の偉大な心がこの時始めて、彼女の心の琴線に触れたのだ。John 自身の言葉を借りればま

さに、'He won the heart that he had never touched.'<sup>12)</sup> となり、この時点で Peerybingle 夫妻の心は通じ合い、真の愛情、真の家庭の平和が訪れる事になる。

#### IV

1843年の*Carol*, 1844年の*The Chimes* はそれぞれ、*A Ghost Story of Christmas, A Goblin Story OF SOME BELLS THAT RANG AN OLD YEAR OUT AND A NEW YEAR IN* の副題を持つが、Dickens はそのテーマがあまりに厳しく重い*The Chimes* の後を受け、1845年の X-mas Book に *A Fairy Tale of Home* を書いた。この作品は一転して、長閑で平和な、家庭の守り神 Cricket の支配する空想の世界だ。一見すると平々凡々とした一寒村の小さな事件を軸に展開される、罪のない平和な物語。読者が最初に感じる印象はこれであろう。だが Dickens は随所に、おそらく意図的に巧妙な罫を仕掛けてある様に思える。ただ読者に対するこれらの罫は同時にあまりに多くのヒントを伴っている為、逆に状況が複雑に感じられ、作者が何を語ろうとしているのか真意がほやける危険性を孕んでいる。そこが又作者の狙いだと考えればそれまでの事だが、作品の持つ意味を考える時、登場人物や場面場面を単純化して整理しなおす必要が有るかも知れない。先ず主人公は間違いなく Peerybingle 夫妻であろう。Plummer 父娘 Caleb と Bertha も物語の中で独立した重みを持っている様に見える。だが Tackleton はどうだろう、May と Edward は、さらに不可解な存在 Tilly Slowboy の役割はと考へて行くと、これらの登場人物が一つの類似性を持っているのが見えて来る。すでに述べた様に Tilly の純真無垢な精神はあまりに John の精神に酷似している。彼女は John の中の 'fairy' 的要素又は劇作品の中の 'fool' としての役割を担っていると言えないだろうか。老紳士と見て慌てた彼女の姿は、John の苦悩を読者に告げる 'fool' であるし、同時に又 John の心の動揺そのものでもある。

John と Tilly の関係がそうであるとすれば、Dot に関しても同様の見方は出来ないものであろうか。先ず、何度も述べた様に、彼女は Tackleton をどうしてあんなに嫌ったのか。それは Tackleton の現実主義を彼女も心の中に持っていたからだった。ではその現実主義はどのような形で描かれているのだろうか。その答えは May と Edward の漠然とした人物設定の中に有る様な気がする。May も Edward も筋の展開の中で重要な役割を持っているのに、二人の人物像が鮮明に伝わって来ない。その理由は二人が、現実の存在であり非現実の存在であったからではなかろうか。そして後者の役割はより重要なもので、二人は Dot の心の片隅に有った Dot の夢、Dot の消し去り難い願望だった。Tackleton の結婚話を機に彼女の心に現われた一年前の彼女の不安と迷い。それが Edward と May を是が非でも結婚させたいと言う形で描かれ、その瞬間から彼女の心は John の心と通じ合わなくなった。John が直感で「妻の心に触れた事がない。」と感じたのは、あの時点では間違っていない。老紳士の中に Tilly が見たものは、Dot の心のこの迷いだったのだ。さらに John が感じた Dot と May の一体感は、正に彼女の心に存在するこの思いだった。

May が Dot の心の中に在るとするなら、Dot の苦しみは永遠に消えない事になる。そこで作者は、彼女のもう一つの側面を別な女性の中に描いて見せた。年齢差が有っても、その人間性に引かれ、その心の善良さ、偉大さを尊敬し深く愛し合う姿は、Bertha が Tackleton を慕い続けて生きて来て心の中に造り上げたあの思いに他ならない。彼女の場合盲目と言う設定である為、外面的なものは問題とはならない。父 Caleb に涙ながらに切々と語ったあの真実の叫びこそ、Dot が John を真に敬愛し、夫として彼女が、John が愛する様に John を愛する事の出来る為の条件なのだ。Dot が Bertha の境地に到達出来れば、彼女の心の蟬りは完全に消え去

り、文字通り陽気で屈託のない在りのままの彼女で、表面的には鈍重に見える John の心に触れ、受け入れる事が可能になる。John はある意味で、深い悲しみを味わう必要はなかったのかもしれない。本当に苦しみ、「心に触れる」作業を必要としたのは Dot であったのかも知れない。だがこの短い物語の中に、Dickens の作家としての腕が遺憾なく発揮されているのは、この点に有ると言えるだろう。Dot 自身の迷いや悲しみをほとんど描かないで、確実に彼女自身の苦悩を描いて見せた。その意味で John はあくまで John であるが、彼も又 Dot の存在を前にしては、一つの「小道具」であったのだ。

*Cricket* の持つ意味を考えて行く時、Dickens は一つのキー・ワードを与えてくれている。それは 'blind' であろう。Bertha の様に実際に目が不自由でも、そうでない他の登場人物でも、総じて作中の人物は、物が見えていない様に思われる。心の中に真実を直感する力のある John でさえ、自分の目で見た出来事に惑わされ、真実を見誤った。Dot は Dot で John の精神の偉大さを見抜けず苦しんだ。Tackleton, Bertha, Caleb の場合も、それぞれの役割において同じ事が言えよう。ある意味で、一貫し統一されたこれらの人物描写の中には、冷静で理性的な Dickens の皮肉が隠されている。読者を感動させるような、エモーショナルな場面や人物を描き切りながら、どこか覚めている Dickens。今にも登場人物が、現実の人間として、動き出しそうな錯覚を覚えるのに、それでいて、読者を見つめる彼の視線が感じられる。*Cricket* は色々な意味で、読者に謎掛けを行い、挑戦して続けた作家の姿勢が、凝縮された形で表現されている作品だと言えるのかも知れない。

この作品は、平和で閑閑な一寒村の情景の中にも、厳しく重い哀しみや苦悩が有り得る事を、見事に描き出して見せてくれたが、同時に Fairy Tale としての性格を、作者は決して忘れてはいない。作品全体に、*Cricket* の持つ家庭の守護神の影響力が行き渡っている。登場人物の笑顔と歓声の響くダンスの場面で突然、全ての登場人物が消え去り、「誰か」が Dot の姿を探すが、残されているのはただ、暖炉の上の一匹のこおろぎと壊れた子どもの玩具だけ。どんな幸福の絶頂にあっても、どんなに深い哀しみの最中でも、時の流れを早送りして見れば、或いは逆転させて見れば、結局この様になるのです。今まであれほど陽気に幸福に、ダンスに興じていた全ての人物が、忽然と消え去るエンディング。その瞬間、おそらく、「誰か」の目には Dot に吸収される May や Bertha, Edward や John の姿が、ちらりと見えたのかも知れない。暖炉の前の揺り椅子にすわり、寛いだ平和な気分で、煙草をふかしながら、やかんのお湯の沸騰する音を聞いていて、眠りに落ちた男の見た束の間の夢。その男は Dickens 自身であるのか、John であるのか。それとも、この物語を読む読者なのか。何れにしても、やかんの蓋の音とこおろぎの鳴き声で始まったこの物語は、完全に Fairy Tale としての性格を持ったまま終わりを迎える事になる。

注

- 1) 本論で示すページは、Oxford Illustrated Dickens (1954) の Christmas Books のそれを示す。
- 2) 1782年、イングランド南海岸沖合の停泊所 Spithead で沈んだ Royal George 号の引き上げ作業と、やかんの中に落ちた蓋の取り出しを作者は重ねて表現した。
- 3) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 143 によれば、1945年10月28日、Dickens 6人目の子ども、4番目の男の子が生まれ、Alfred Tennyson と命名されたとある。おそらく Dot と John の間の男の赤ん坊はこの子をイメージして書かれたものと思われる。
- 4) *ibid.* p. 141 によれば、Foster に宛てた手紙の中で、この作品の構想を語り、その中で *Cricket* を、*"The Cricket. A cheerful creature that chirrup on the Hearth. — Natural History."* と位置づけている。
- 5) 注4) の Foster への手紙の中で続けて Dickens は、*"Cricket" should "put everybody in a good temper,*

and make a dash at people's fenders and arm-chair as hasn't been made for a long day,"... would "chirp, chirp away in every number" until he "chirped it up to-well, you shall say how many hundred thousand!" と Cricket の役割を決定し、作品を書き始めたのが分かる。

- 6) Charles Dickens, *The Christmas Books* Vol. II, Penguin Classics, 1971, pp. 10-11 によれば, *Cricket* は発表後一ヶ月以内に17回以上の劇化がなされ、上演されたとあり、この作品についてある者は 'puerility and theatricality' を語り、さらに多くの者が 'lovely portraiture, sweetness, simple charm and wholesome Englishness' を語っていると記されている。
- 7) *The Dickensian* の中には *Cricket* に関する研究が数多く発表されているが、その中で Dickens Fellowship のメンバーによる上演の記録が記載されている。例えば、*The Dickensian* (Dickens Fellowship, 1906), p. 205 には Garrick における Arthur Bourchier 演出による劇の成功が挙げられているし、1918 年には p. 79 で Edinburgh Branch による上演の記録、1908年, p. 189 では *The Cricket on the Hearth in Canada* が演者の写真入りで紹介されている。さらに *The Dickensian* (1916), p. 116 では Paris の小劇場 Rue du Rochers での成功の記録等今世紀に入ってなお世界の各地で上演され続けているのが分かる。
- 8) Dot が触れたこの歌は、*Against Idleness and Mischief* と思われる。それを紹介すると、

*Against Idleness and Mischief*

How doth the little busy bee  
Improve each shining hour,  
And gather honey all the day  
From every opening flower!

How skilfully she builds her cell!  
How neat she spreads the wax!  
And labours hard to store it well  
With the sweet food she makes

In Works of labour or of skill  
I would be busy too;  
For Satan finds some mischief still  
For idle hands to do.

In books, or work, or healthful play,  
Let my first years be passed,  
That I may give for every day  
Some good account at last.

(I. P. Opie, *The Oxford Book of Children's Verse*, p. 49)

となり、この歌に気付く読者は作品の筋の展開のヒントを得る事になる。

- 9) Johnが引用したのは、  
Among the insipid legends of ecclesiastical history, I am tempted to distinguish the memorable fable of the Seven sleepers; whose imaginary date corresponds with the reign of the younger Theodosius, and the conquest of Africa by the Vandals. When the emperor Decius persecuted the Christians, seven noble youths of Ephesus concealed themselves in a spacious cavern in the side of an adjacent mountain; where they were doomed to perish by the tyrant, who gave orders that the entrance should be firmly secured with a pile of huge stones. They immediately fell into a deep slumber, which was miraculously prolonged, without injuring the powers of life, during that time, the slaves of Adolius, to whom the inheritance of the mountain had descended, removed the stones, to supply materials for some rustic edifice: the light of the sun darted into the cavern, and the Seven Sleepers were permitted to awake. (*Gibbon's Decline And Fall of the Roman Empire*, Vol. 3, Everyman's Library 436 History, pp. 340-341)  
と言う故事。
- 10) Tilly は直感で老紳士の中に悪魔を予感しているが、while Tilly Slowboy, with a melodious cry of 'Ketcher, Ketcher' — which sounded like some unknown words, adapted to a popular sneeze — performed some cow-like gambols round that all-unconscious Innocent. (p. 171) で示される彼女の行為は、明らかに、魔避けのそれである。



*Christmas Books: The Cricket on the Hearth* と Dot (本田)

- 11) *The Dickensian* (Dickens Fallowship, 1906), p. 250 の中に *Cricket* に対する一般的と考えられる意見が述べてあるので紹介しておく。  
Nowadays we read so much, hear so much, and see so much of the decay of home life, that it is quite refreshing to dip again into that delightful little book *The Cricket on the Hearth*, the whole purpose and tone of which is the uplifting and glorification of home. Had its author written no other story than this he would still have endeared himself to all hearts. Around the happy hearth of the honest old carrier and his thriving little wife Dickens gathers some of his finest creations and pens some of his brightest fancies.
- 12) 本論の中の208ページの引用文では, Yes, yes; some lover who had won the heart that he had never touched. となっている。

—平成6年10月13日 受理—